繪本豐臣勲功記

八編

六

特
遠13
2209
76

遠13
へ
2209
巻 76
特

繪本豊臣勲功記八編巻之六

目録

元長以大砲術遂隠言尾　附　松山落城
同下く図
熊谷四郎左まつ決死奮戦の図

久武為擒無端得金子助　附　歷軍大敗

吉川小早川膊川大敗軍　附　元長竹流

吉川元長膊川竹砍の圖

清正察歆謀計固禁出戮　附　元長破制

豐臣記八編卷之六

續本豐臣勲功記八編卷之六

東京　櫻澤堂山　刪補

元長以大炮術逐隨言屋　松山落城

怒涛ハ水も巖石を碎き滅されバ火も虻蠅ハ剋刺らる。万物朽て。存する時ハ利ハし。亡ぶる時ハ忽地絶し。然ハど不拔原弥八郎秀重ハ大炮荷ふる牛戎紅て難ふく城の後背なる。尾呻の條の高峯ハ登り。これより城を視流セバ。開歩なきども城中の。陣廠こくの張燈庭燎ハ不堂ゆう不祀微さきて。遠隅の射楼那隈の陣廠。悉く炮路の紙を定めて。それぐ弱伍し。待際ハどふく怵内ハ。暁報る鶏鳴て。東天白く横雲斷。さきや時こそ来

りこれ一吐ふ放てと揮る旌ふ。待設りこる名士輩十具の大炮一同ふ火蓋を裁て放ちれば。面関の門の隈射樓ハ。剞劂ここと一発ふ。微塵とふつこ飛散こり。二度目ふ羅て放つ石ハ背関の路を冠んさめの方術ふまきバ。炮発十分ふ傾けさセ。故てハ其音雷霆の係く。的ハ遠さ〻背門の。射楼も堞も陣廠も。ふ裂万破ちる程ふ。吁城門ハ砕けこるぞ。進めや蒐きと板原ら。鋒概ふ振正斜ふ奮然として跳出きバ。這躅の猪名一ふ餘人長蛇とふつて突投こり。這時右川元長ハ面門の方へ向ちんと。山の禁ふ磬えこりしら。二度目の炮発を聆と脅しく。きハや蒐きと正面ふ。徐勢を紐て推登る。背門より乱投こる

板原ハ持こる薄の軍杖を。車輪とふして批揮こ。猜名歩卒の嫌ひふく。進む故も。遅く故も。血煙烈しく拗殺し蕪刈し。万面ふ畜て畜戦き。這晌金子侍名清ハ。面門の方ふ走りくるら。背門の義の最烈しきと聆より。馬を跳して地来り。板原弥八郎を殺ると等しく号呼て撃て蒐り。子慶万化の術を揹して挑合。まつさ面門の破口ふハ。然谷四郎左衛門ふ。柱杭。飯田。必死とふつて拒杭といへども。大将元長両度までの。彼の恥をきこ〻ぐんと。死憤を発して指揮しつ。こづこ馬を正斜ふ進め。子を下して戦ひくる。名。之人ふ後てハ面目ふして。佐く木三良左衛門。山形九左衛門。神保亘理。宮庄覚蔡

つ。池田利兵衛ふどいふ猛傑。死ねやくと攻起るてぞ。
推雲爰兵衛。飯田掩左衛つも敗所ふ痛を負。幅たゞと逃返
を城。右川元長張率ふ楯揮して。法方の陣屋へ突掛敵
さセ。二の九三の九ふ推逼ゞまバ了得の金るも幅ふまゞと。
覚形を決し。一応松山の城ふ退去。惜て遠恥を雪ぐんと。おち
心の属さるところへ。飯田推松走来り。金子を持て今辛
万苦し。遂ふ一方を形破り。僅ロ五十騎ふ警戒され。退
来る敵を追拂ゞ。闇遠城岩佐ひふ。松山出て退て行。
佐又熊谷ロ良左衛つ勝直ハ。面門の敵を拒抗在るゞ。大
将金子の行衆知まぢと聆よりも。戦死セしふや落
るふや。衆評ふし。弱んものと。抔憾ふゞ城を後ふ。

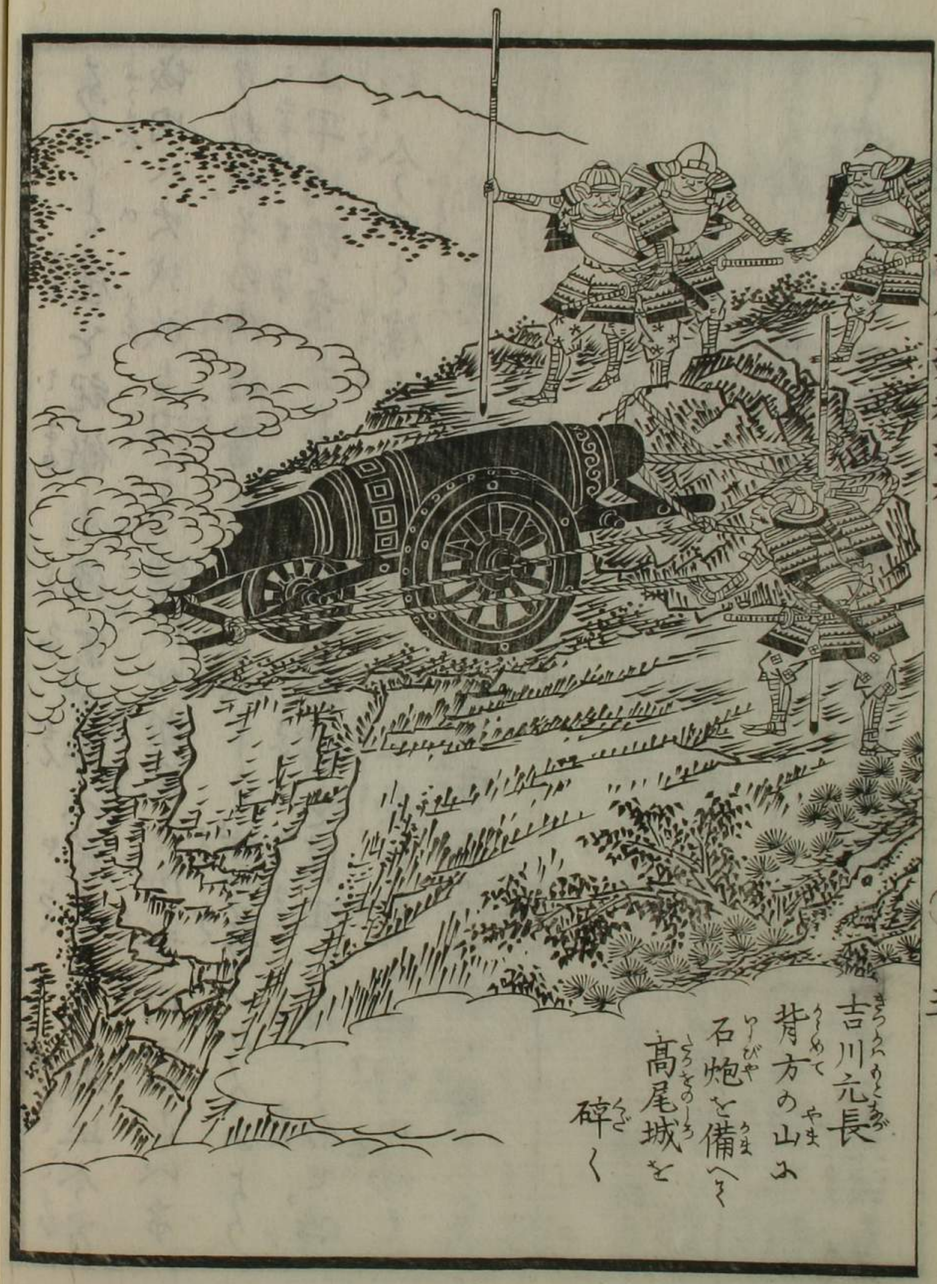
同じく宋道左法退く。右川勢ハ遁まふ去るふと。跟退
逼ふを迫づけまゞと。搦敵し。ハ法退ゞ。退返しハ純
るゞ。敵衆ままく童惜りて。面騎だりの従兵も。今
ハ悉く戦死し。熊谷単騎ふ警戒され。馬も既ふ乗殺
しゞれど。当分ふ一騎の痛も被ぢ。二三百の敵を引受
憤突怒蟹ふ丈八の強も敵の如くふ。梯ども割ども
囲ハ解ゞぢ。今ハ已戦死と。命を塵ふ戦ふゞ。時ふ金
子侍兵衛ハ。城を離まて宋道を。北丁だゞり来ふるゞ
ゞ。忽然として後の方ふ。騒の声の聞えゞれバ。馬を駐
めく後方眺り。遥ふ聆もる。慌呼びハ。自分の城ふ踏
止り。敵ふ当ると覚さり。定て熊谷ぬんぬべきゞ。救

ぎんバあるべくバ。君ハ既ニ熊谷を殺しつるとおもひ
しニ。活延らうる妙しさよ。個く返して得させよと。ハ
来佐兵衛正斜ニ。馬跳らせて紅蹊せバ。言入ぞふと推
松飯田四又十郎が鑣ちゝべ。蓼然として敵中へ怒煙
を発て掛て投。巴字ニ紅記。卍字ニ跑記。右ニ傾ド左ニ
側し。云様云様ニ掛破り。頑頭し。ちんちく熊谷を救
出し。味ハ戦ひまハ退くその話きこと韋駄天のごとく
ちゝも止らざりけれバ。右川勢もこれまでありと退
来ニして退返せ。全子佐兵衛来熊谷ニうち鬱ひ。さて
く足下ハ今日の拳動雅々ハ逆ぶ事あるん。報言尾
と退く時。足下ハ戦死せしことぞと。いとゞ哀悲退去

しハ。今再舎の嶽しさよと。或ハ労ひあるひハ慰ハ推松
ハ馬ニ投乗セ。松山の方へ落て行々り。備又右川元長ハ。
弦将と集めて戦切と貴し別て板原李重ハ勢切莫大
ありけるバ。逐日襲愛縄るべしと。言尾の城を乗取り
る城。歓ぶ〳〵こと涯りなく。弦士の疲を治めて后。加
茂ニ平川ニ後逼ニさんと。その准備ニぞ迫だれ々る。甚
ハ周き加茂ニ計阪清正ハ。洞的の城主五十嵐内匠おハ
〳〵弟兵庫助ニ。計略を練合セ。松山の城へ寄ませ。
面門ハりハ加茂清正背門ハりハ小平川隆京四方繚清
の大軍ニて。稲漫仆圍と攻ぎ〳〵り。開も松山ニ社し
る城ハ孫弟一の要塞ニて。元祝去バ〳〵猪神を謁

一掃成さる城墨なまじ。容易陥べき地なゝざる哉。清正頑て和さるも京。五十嵐兄弟ハ密議を謀して。内応させんと料理さる。然ども素是敵なまじ容易ハ密容されぎまゝ元祝の長男さる弥三郎信祝一万餘騎て。当城後逼の用柄もあるべ。軍延引ハ有ゞ。攻記ること最も急なり。然るハ城将久武内義助長家。自身ハ西門の敵を防ぎ。又十義兄弟ハ背門を守らせて。小早川勢を防ゞ。隆景城中を窺ふ。這方の守将ハ。五十義兄弟なれバ。城門へも攻近らで。只攻んとする相を示さ。当天も澎く暮て。三日月西天ハ沈まんとする頃。五十義兄弟頑ての内通。この時

なりと虚を祝徹し。隆景ハ陣へ篝章旗を射込。今宵城内へ火城放ち。内より裏風を推開き。陣案内稟さべ。なれバ。その陣に番これなるべしと。稟送りなるハより。小早川隆景おもひハ歓び。河律を法正へ謀し合せ。時刻今やと候在さる。然るハ当歩の変の時計の鳴くこと。燒く爆と爆る音して。背方ハ火の揺を発しる。進名ハ其とるハ嘶して。亂入んと法名を探出せ。城中ハ懐ひも設ざるるなまじ。上戦下へと騒動し。掃枝よ水よと狼狽る。久武内義助おもひハ淡き。ちや火を焼せと励し〳〵掃掃なし。猛火ハ吹るといふといへども。海風烈く吹発て。火ハ五六ケ所ハ燃拡り。餘焔城中ハ充波せ。


吉川元長
背方の山ゝ
石炮を備へ
高尾城を
碎く

浩る所へ紱年壹貳。五十藏兄弟憂心して背門の麥車と水殺し。鳳凰を開て小早川の軍勢を導客こうとおへぎ〳〵所へこう。内藤助大ゴ眈り。吽杵憾や養粉ゴ。ゑと遠るゝの五失出来こう。先や忠義ゴ能こる。双を柄て報紙ゴ。臣を徴塵ゴセぢんバ休まじ。怪き兄弟ゴ挙動ゴあと。麟齒をあしして紐出る。這晌加藤清正ハ基あしの大炮四五挺聲嵩こ隈射樓を聲嵩し。飯田覺兵衛本儀右丈。木村又蔵。井上大九郎。梅原藤五郎。鶴平次郎。小関平助。堀権右衛門。酒匂忠兵衛。斎藤五本小代下総。阿波仔兵衛。松下清兵衛らゞと乗込ぎり

久武内膳無端得金子助一　歴軍大敗

維摩の室ハ四方一丈ゴして。維百ゴの大衆を容。加藤の為ハ天二の短ゴゴして。目下大海を遮る。術をゴゴとゴいふこも。方僅加藤の猛勇士一万餘人漫然と。松山の城ゴ泥入をいうでら襲防ゴるべき。了ハ久武内藤助ゴ奮迅の猛威を極め。掉孔四ゴるとゴいふとゴいへども。ゴれ城遊るゴゴあこゴ。法勢と二の丸へ容めつゝ八方へ氣配して。橋揮さる際ゴ既ゴの発ハ燈くこして二の丸へ。燒轉りゴるゴゴり。這ゴゴも拒抗ゴ術尽て賠償ゴゴら自名を率俱し。一丸この城を落遁。伝祝ゴ後逼と一隅ゴゴり。然して五十藏兄弟を伐し。報逆の罪を乳を

べーと。吐炮の係く弘拔て。加爰ゲ圍を辛く縋ゲ是。西南と出して紋走さて。遠期ハ隙で久武ハ。從ふ軍ハ僅ハ十五騎。それさへ涼瘢淺痍を負ふて半は手ぶゝ主人を守り。谷陰を分て落て行。爰ハ上方の勇士。石井名義といふものあり。五十騎ばかりを從えて。頻て加爰の指揮を兼。遠方の名陰ハ埋伏セしゲ。今久武ゲ十五六騎ノて。遠谷を潛くと能行と。情見の名の知くセ々れば。それ遂まもふと。拒強の力士五十余人発記馬の四足殘蘿俗し。久武堂の十五騎を。ま〳〵〳〵ちハ警捉て。方僅ハ内義助一騎とあり。逃行ところ戎石井名義。名義をもつて久武ゲ騎る馬の尾負を撃。〳〵れてるハさこしも

搖らぎて。屍風の係く例ぎ々れば。内義助ハ正逆ハ谷へ新沒と墜入ぶり。矣義さぶさ溪水ハ跳入て。捉て壓へん。とをといへども。猛勇の内義助。改返さんとさるところへ。力士四又人蓋重り。索を羅てらで活捉ぶり。名義大ハ繞森ハ。邨る采馬ハ摺騎。清正の陣へ奔んとて。松姫の准彼ハどして素朱し道へ退返を。活るとところへ。金子信名朱。再戦ハ無谷を助出し。松山の城の後逼をセんと。忘忙〳〵山路の。四凹と攀つ下りつ馬を狩めて能乗り〳〵。路前を睹と視て行ば。五十騎ばかりハ敵とえ〳〵。一個の大將を嚴〳〵郷め。馬ハ舁騎セ行ものあり。〳〵〳〵瞳を脳て見をば。松山の守將久武内義助長寺

あり。佐久間大ふうち警き。久武活る落果あれば。院松山八落城と覚えたり。方僅内蔵助と。逗谷みして祝する八。自方の幸福ふこそ。それ孫さといふまゝふ。飯田植松跳蒐て。力士車と薙散セバ。然谷大喝一声して。石井名義ふ掛て蒐る。名蔵鬼やとおもひあづゝも。通きぬ和と撃合さ成。然谷ゲ横ふ拂ふ絵の撫。石井ゲ肩ふ当ると兄えしゲ。首ハ微塵ふ飛散さり。佐久間自ら久武と馬より卸して郷と解。内義助ふうち嚮ひ。右川の為ふ言尾の城と陥されつるよりと品徳バ。内義助も面目ふゲふ。五十義ゲさめふ歎クも。松山落城ふ逗びゝふども。活所セつ今。亦義谷ふゝ。助けらるゝる恩と謝し。然

して久武ハと草ゝ。名刑まで。城と棄されゝるのゝふ。らぞ。味切あき実ふ活相らられ。ふ面目ふ世の人ふ。阿谷阿谷新と合さるべき。名ハとれより薪び。故中へ炊て投潔く戦死して。陰鬼と化て足下倚へ。生前の浄死まを。べゝと。泪ふ。ふ言発ゲれバ。今子佐久間ハとうち振斬ハ理ふ。ふ松山落城ふゝつるふとハ。五十義兄弟ゲ悪逆ふして。些も足下の恥ふ。ふ乃士身不肖ふりとゝども。絶まで足下ふ力と勠セ。謀議成繕らして。逗遁の恥辱と雪ゲセむんバ。弓矢八幡武士といふまじ。畢ふ心残結定ふ。再戦の機とそ肝要ふ。兼叫バ信祝君。一万余騎の勢と以て。後逼ゝふふゝふ。

いまゞ松山ハ到りまさぬへ。敵の殿守ハ遁られつるものゝ。進発し給ふ路道ハ大洲街道なんぬめり。先や俺們足下と偕ハ。伝祝の勢ハ加藤蚤歩も暁て愉快し。名ゲセ玉へと歩伴羅。大洲の方へ独向ひぬ。彩て亦加茂清正ハ平川隆京ハ一隊そ尾戎全うして難なく松山の城を乗取。凱歌と喝へ備勢を労ひ。別て五十嵐兄弟ハ東日内府ハ知て。褒賞きべき言と約し。まづ会卒の疲を補ひ。因城中の火を消さセ築塀射楼の損崩戎繕ひ。此城を亟堅竈とあし。暫く休息セさセ。浩ることを知ハ紅馬来り。常く告ていとく。人〻松山の後逼とし〻。長谷系弥三郎伝祝一万餘騎の勢戎もつて。

大洲ハ城守る。石川八郎左衛つゞ陽ハ独荒り。自方発くお宥い。蚤く御加勢ものべしと。注伸と酌て加茂清正。然あらバ加勢とつゝ〻しして。假ハ伝祝と拒抗亟重てこゞ〻独向ひ。長谷系弥勢と微塵ハ合さんと。まづ加茂清会来ハ二人孫猪の会戎接け。石川ゞ陽へ独加さセ。游て清水長三郎。是ハ石川の陽ハ独ハ。拉て返して松山ハ。小平川ゞ陣ハ独会。脇歩松山。宮尾の冢道一在谷際埋伏セ。石井会義ゞ切伝ハ。久武内蔵助と活捉。石井俳の会士ハ食撃也て。賜久武と奪れ平ぬ。然るハ今まゞ陽の勇士。然谷植松。仮田と叙め久武内義助一斉

に伝祝ら隊へ加はらんと。大洲道へ純行ところ。土州阿波の殿守らる。石川加賀が隊に合戦すり。是は別地長男和泉伝祝ぶ。一万餘騎の推進て。彼所に挑合ふをば。合子久武然谷脩。脩らと自軍と相撃ふを。蚤く御故名あらんば。合戦殆ど危急ふ。快く御出馬然るべしと。云奔てる戌拔返を。其は一大事と陸宗より。清正が方へ廩し遣し。直地伝隊へ徇流し。両勢合せて三万餘騎。東西に散ぜ邪急ふ。大洲口へぞ進発すける。然らに石川八郎左衛つる。二万餘騎の名を率へ。土佐阿州の殿守として。大洲口の絶所と緝断。柵鹿角構と嚴しく結セ信祝が方を拒止て。此所と寄途と接絵を。清るところへ加賀清名衆

二万餘騎に。力を勃せ。さり乍ら容易に欲戦通をまじく。勢猛く見る所に。おもひも設ぬ合子久武勢に徴ふを。水も力絶ふ。損と所ざる猛士強卒。施憤虎怒して。殿守の勢が。伝祝と戦ふ伝方より。爆然として突蒐る。石川加賀うち続き。四万餘人を両方に分ち。加賀清名衆に伝祝を拖。対石川八郎左衛つ。合子久武に領拒て。退つ返しつ接合すり。素より。これば。方僅此所に。暗数の軍に孤軍くらを。戦ふ名に。四五十騎に足ざる。石川渠脩を大に嫚り。弊軍で麾却せんと。隊仕戦鵜翼に推開き。一騎も剿さじと。掛蒐をば。合子久武然谷脩

八纏魚の係くを備を堅め。危岸を在しる嵩石の。波濤と砕くを奚ぞ。練火血烟沈烟進ぶ眉庇を段板退き。バ弦角幡持笛猛威を極むる接戦の中を。然谷四郎光忠。三間棟長の三鋼の戟を。鶴短を推綽振雑車仍名八左右を突抜。此隊の首将石川八郎左衛門を迫づきくるゞ。隨愛の係き声音を発し。是ハ此隊の名将然谷四郎左衛門を睹て。ゞ土列の悪鬼を拉ぎ。ゞ飛ゞ百練の。捨の鉾を受て走よと。羣蠹車の係く掛発を。云得ゞと石川も。三尺五寸の脇刀もて。円結つ外解つ集散離合進退虚霧出没入百吹百虚ゞ際。化然として闘ゞ。武勇を名を得し然谷ゞ掛

発を捨。洗最活く。石川倨て義換ゞ。肩背痛く鴉串を地。向暴くるゞ隨るを。独傍て首撃頻を。首将ゞを。ゞ従車の。いゞゞ全きこと城得ん。右脇左側を乱走ゞ。ゞ。ゞバ。全ゞ久武大を繞ゞ。迅勢威を加ゞ隊伍も。微塵をセよと指揮をげゞ。突然として撃て蒐る。茲を。ゞ栗山将監。柔名左郎名来とへる勇士。これハ久武内蔵助と一斉を。松山の城を守りゞ。五十蔵のゞめを陣殿を焼ゞ。潰を甲川ゞ猛名侍を。前後を撃ゞ。ゞバ。ゞ憾ゞゞ城を弃て。百錬ゞの残名を逆へ。内蔵助の跟を慕ひ。困逆へハ走らゞゞ。濱の方へ退きゞゞ。伝祝の出馬を聆ゞ。同じく大洲の逆係へ。棲を

様で弛来る所。迚地不合戦ありと聆装こと進めりしが。
自方の勝利と客るるりも。些も怪孫なさばこそ。加爰
清兵衛が横隙より。嗄呼で突崎る。これ不よつて〻弓得
不猛き清兵衛も。八方を拒抗不靜力なく。二子孫人の自
方さへ。大半撃〻まて方僅ハたゝや。首将清兵衛も方と
く危く。戦死とこそ客ゑ〻〻〻れ

吉川小早川膊川大敗軍　元長竹流

敗老の謂る詞あり。海水河水と闘ふ不。河水ハ方なるゞ捷
とつゝり。是背面の勢不因るべし。向ふ勢ハ十分不しく
右る勢ハ五分なるべ方なり。今加爰石川が敗軍も。この理
不屈まるのゝあるゞ。故を三方不迎〻るなるべ。敗る〻

もまゝ〻因有ゞ。然バ加爰清兵衛ハ二子の勢も。貪戦死して
僅不三百四五十騎。それさへ蠟然として。然なゞ〻赤孫と
も謂つゞ。太刀ハ鋸鉈薙刀ハ鋸の如くなりるを。棟
不ちゞ見来る血戦。推拭ひおしぬぐひ。肉彈骨のゝゞら
る〻まで。死ねや〻と亂聲を。方僅羊刻を接紀ら
ふハ。鋸卒ハおろゝ清兵衛までも。麋不セ〻まんだいゞ
危きその面へ。加爰清正が先陣の勇士木村又兵衛井上大九
郎。赤星右郎兵衛。庄林隼人佑。電程不走る雷獣が。韋
駄天神を驚〻る如く。蓼地不弛来て。金子が兵士の
後方より。肩腰背股脇三人五人一隅不。殺奏〻りる
猛勢ハ。多虎悪嶺不牝ふゝと疑ひ。方猿毒谷不異客る

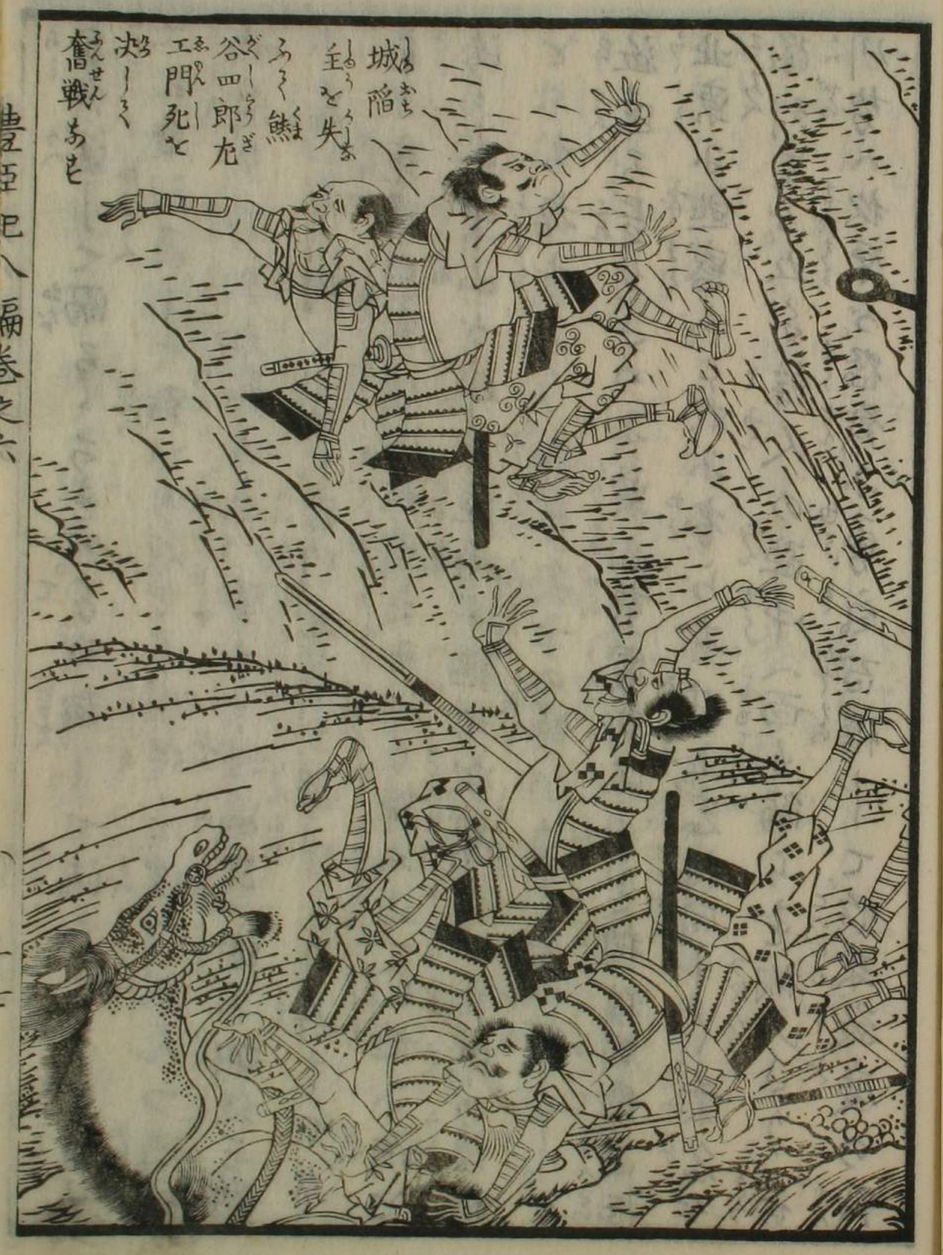
らと怪しまる。これ不経ひて加爰ゞ二陣。喊を作て推進る甚と祝るより金子侍ゞ名来。軍場切者の達人なれば軍ハこれまで蚤退と。伝祝ゞ勢と陣を合セ凱歌唱て大洲の方へ四五町退き結陣しゝり。是大洲ハある猿上りと云ふ所あり。当日ハ六月四日ふして既日も全く暮て これば陣第不整多燎を焚セ最厳重ふ柵鎖ゝし。然して金子久武侍伝親の第ふ祖候しつ軍議評定ふゝりる所へ焼山の城代吉良播ケ守一万余騎ふて 弛加はる。これふ因て四国勢軍威まさ〳〵熾壮あり。機会兄相不変ある。雑亜卒一個陣第を。緋細セしゝ婆提元。徘徊を鞠ふ五十差侍ゞ。使者あるゝ ふて。一封の

書簡を出しゝり。ゝある緯を記しゝりと。伝親これ戎 格て覧るふ。五十差徳居京あゝざも。今清正ふ降条セし 緯。命を惜ミ利を貪るの私あゝざ。余是を君の御為ふ して。長号第の家到絶ませき科理あんぬと。五十 蔵徳居ゞ心中を最〳〵備ふ書記し。清正ゞ嚮伝の擣書 まで戎。懇ふ殆りゝれば。金子ハ放当と孝を掲て。咱も 渠倍ゞ心中を。従第斯とハ察しゝり。故ふハあれども 頼気ありと。使亜を労ひ返らセゝり。備又加爰小早川ハ。 当日も暮ふ迫びゝれば。故を退逼戦ちんも。地理よりら ざ去て。猿上の要害ハ最も険阻ありゝるを元時川を赤海 り。二十餘町退て登路十町ざりある甘柿嶺ふ陣戎

構山の砦ヲ焚燎と四五ヶ所焚セ炭と守らんとする所へ。
吉川元長諸勢を率て。弛加たり。曉る戌時て吉川勢猿
江へ推進り。金子久武然谷倚得りと一地ヲ斬て下
り。弾丸さかぐ発炮の係く。検迫ヲ跨り駒谷ヲ踏り。智
勇と振ふて戦ふ方ヲ得の吉川元長も四五度の合
戦僅あり。れば。小早川ヲ陳ヲ洒ひ甘柿嶺ヲひき退き。
軍の評議ヲ迫ぞる。嗚ヲ主計頭稟されるや。今更
自軍勢まで。敵ヲ窺乱と拆ゑ。敵名大ヲ威を増
あらん。其たりうハ一疑生ぜり。所謂ハ五十嵐徳吾乃
軍。自方ヲ屠きといふとハ。今金子倚ヲ威を漫
らきと称ものあるべ。人質を妄るハ素より覚期。変心の

是を許ヲし。遠方ハ是下倚膂力と躍し。敵の虚と窺て
破らせ玉へ。嗚ハ是より松山ヲ退き。渠倚ヲ吉川戦察決
て后。移び出軍いさもべ。と。稟さヲ西将検ヲもと懐ひ
これヲ同意セ。きしうバ。吉川小早川ヲ遠方戦信セ清正
ハ自勢の城名を纏め。松山の城ヲ引返し。入城ヲし
五十嵐倚ヲ。吉川と探らさとり。然ハどヲ吉川ヲ
早川の両将ハ二万五千餘騎ともて先日。敗軍の恥戦を
ぎ掃んと。甘柿嶺を推発し。勝川戦ヲ不して。小早川
ハ河上ヲ列陣。吉川ハ流流の下ヲ陣伍きびしく磬え
つる。川を渉して整発さんと。軍使専あり。長
弓永弦の防陣の名士も同じく河の那方ある。岸より

四五町近場と殘し。隊伍を立てるその相ハ。右川勢の隊へ向て。栗山將監を先陣とし。這隊の主將ハ久武内らの助五郎條。亦小早川の對隊として。桒名弥次兵を先陣とし。右良樓广寺を主將として其隊の軍兵おゝ〳〵五郎。後陣ハ這隊の紙大將。長谷部弥三郎秦伝親一万余騎。全子信兵衛親忠ハ。三子條騎ゐて旌軍とし。當日ハ同月十三日勝川の両岸ゐ。他軍と自らとの隊〳〵伍〳〵雑雑珍刀寄る目さへ冕〳〵として最觀く。殺気凛〳〵と勢へとし。時ゐ南方桒名ゞ先陣の隊中より。本山方迎三百條人ゐ先達切參をせんと。河を渉りて推出せ。小早川の斜紙井上九郎右兵つ。志村五郎兵衛と云ふ。新と云るより悟き歌の軍勧ゐ。先鋒の隊せ〳〵くゝまんぢと両將計儀と條合せ。まゞ東天の灰暗ゐ見バ。是俥術と二ゞ條人。一隊ゐ合せ〳〵推出し。小流と渡り河原ある土堤の茂叢の堆き所ゐ。多撓敢百筒陣掘え沫唾と呑て待設〳〵とし。新しゝも紅らゞ本山方迎三百條人と魚鱗ゐ備へ。河と蚕流〳〵と推渉し。此岸者て進むところ戎待設ける井上。志村。其ハ警発せと指揮の下敢百の多流一烟ゐ。衷〳〵燈と連発されべ本山の陣卒驚顧ゐし。蹈跎ところ戎志村。井上二ゞ條人戎槊ゐ開ろせ。馬騎列て飯〳〵と長戎の絶と弟同伝ちせ白浪跑起て掛蒐ゐバ。不云と驚ゐて此も惑らゞ。右ゐ顧び方ゐ倒ゐ。


城陷主を失ふく熊谷四郎左エ門死を決し奮戦あと

豆戈逆して溺るゝあるべし。戈翻して流るゝあり。左迫も二三度引返して戰ひくれども甚得ざ。浮つ沉んつ逃往後背戈井上九郎左衛門を蛮くも追逼。只一絵ホ掛殺を。斯と家より河下なる。右川元長ゞ陣中より。甚たゝやゝ也と先隊の勇將。山形重之助一ゝ孫人正一門地ホ河と陸して栗山ゞ陣ホ独向ふ。継て杉原弥八郎伯の陣梶とうち振ちふり。雜兵士の嫌ひホく。奮然として猛進る。是ゞさめホ栗山勢。雲脚泥ゞと狼狽周章。南西此東ホ逃惑ふ。これホ者らざ井上。志村同ゞく来名ゞ孫列なる。五ゞ孫人の陣中へ面も解らざ掛入ゝり。右川勢ハ杉原ゞ。猛戰ホ勇を百倍して。吹来致度の戰

場ホ紋北〳〵る。耻雪ぐんと。勃然として接起るホゾ。栗山勢ハ後走。後陣の方へ崩れ。遂ゞ将栗山将監親久爆然として獅奮と発し。遠き自軍の戰相ゝホ。咱ホ継けと揮と八尺ホ白く翳セし大薙刀と。翻波の像く振ゝ。山形ゞ孫伍へ斬て跑る。杉原弥八郎眦と。良獲こそござんあるとと。練材梶と横抱ホ。誓て荒ゝバ将監親久身と沉ませく巣んとさるホ。誓迫猛勢陸愛の如く。薙刀の袴と発行と打ら込むところ。戈劈面微塵馬より下へ撃墜セしゝ。杉原の従士。走倚て。ゞ疾く首戈到頂ゝり。這勢威ホ久武も。遮徑て来名と偽ホ。後陣の方へ逃亂る。時ホ這隊の紙大将弥三郎伝祝ハ。脱ホ関

張良の勇あつて胸に能風伏諸風巣の籌策を懐く四國安雙の名將あるゞ自方の先陣讃く紋並まるを祝るるも。陽ある故に陰に某ん。孫伍を下ぜバ紋名に誤引せらきん。疾退と雖木勢を四五町退せ。養牛といへる廣原に。脚臨固孫伍を飯と鶴翼に列し。金子と右の先孫に立セ。石谷と左に進ませ。猝跑る自方の名を中へ通して挾ん〳〵と巍〳〵然として磬え〳〵り。目速通隆宗敬陣の。孫伍揺さぜ勒さるを。眈と視て行正先に進む。進の大旗立止め。螺を鳴して法軍を止させ。小刻休息せさせ。翌日は別て署令烈〳〵。爆燒らゝ〳〵だ〳〵の熱天に。名車ととし〳〵鏡令揺で。孫伍踈海に乗え〳〵ると。伝祝

ととや近响で名を下して敬に当らん。門く進めと指揮たつ〳〵もこづ〳〵正斜に跑出た。伝祝当日の扮は。唐綾縅の大鎧に蛇尾の盛の頭と固く締。弱の馬の八すに剌る。疾花といふ後足に金霞輪の鞍安クセ。拵に色の縁繻と。金糸雜て弟後に被。古金と見えて赤く輝く。軍配團扇の当懸に。辰己鼎を捧て闘う〳〵。四尺五寸の大右刀と胴屈宮く当鑿し。大唱一声跑る。これに継て石谷名に自名五百騎馳行に推出し。小早川が孫伍は棚投う〳〵。その行相は悪魔波旬が。疫鬼魑神とうり集めく。大槍敵に暴るゞ係く右と薙ぜバ五騎七卒。血風反散して欣例され。左と拂へバ六甲九曹。苦声とともに薙

腰だに。く角方面伝親ゞ。四方へ迫進敵もなく。能の堅つ
猛戦と井上九郎右衛門ゞ畏れもなく。蒐地ゝ馬を進ませ。
中大張あゝ大将ゝ。最見冷しさ沛勃ハ這戦場の
花とこそ見め。其花一枝折んと欲せ弥三郎殿見家と。
て蒐ると伝説も莞爾と笑ふく。得こそ惜しゝ渭もさ
也。頃花折らんとおもふハ。汝ゞ老さる枯枝と。まづ斬
折て薪ゝ成せぞんべあるべくゝと棚出を徐徒伝説ハ。
なるの勝ゝ撃揮こ。貴ゝ薙所ゝ弊甲を。殴ハ盛ハ微塵
ゝ砕け。韓竹割ゝ九良右衛門つ。屍ハ左右へ槿と墜。主将ら
れて這跡の残卒。朝風ゝ散る零ゝの係く。顧つ溥づ
改廻りつ。右顧左倒ゝ孤走せて。それゝも脂せぞ。志村五

郎兵衛正躰ゝ進んで。信説ゝ縛て蒐ると得さるハと。小
冨士郎ゝ等しを太刀風。陽声と発て撃迫修徐ゝ。志村
ゞ徐ハ楼首より。拂拭と折ゝて堪得ぜ馬と返して逃
仕と。通せまゞと弥三郎。奔電の係く組忌脱者舘五郎
兵衛。警搏ゝして沼田の中へ。正逆相ゝ捉て抛投勢威
猛つて蒐地ゝ。小早川ゞ本部備へ。裂然とゝく斬投と
ころゝ。毋の長六尺有餘の勇士。八角ゝ枷木赤河梨梶
の十三貫目ありとゝふと。いと佛くと揮西周。これハ小早
川隆景の家臣。山田伯太郎光信と号平。撃て蒐ると伝
説鎌さぜ。奮くと名て太刀打合せ。能進虎退の猛奮ゝ。
地も裂山も抜やとと。猛くだりの烈激突戦。五十

餘交ぞ挑こ合戦刻の軍ホ了得の伝覩。戦ひ労ヒて山田ゞ梶と待遇晩の。撓ころれば馬を敢して引退く逃しハセゞと伝古郎。憂曷一声叫ぶまゝホ。馬を跳らセ退跑ると。伝親五十歩だゝりゞ程逃ると。弓えしゞ。山田ハ結く蒐蒐つく。只一撃と撃ゑる。梶翻潜て撲れホ。霹靂の像く薙欧る太刀ハ。山田伝者ゞ倍ゞ。脩の下まで殺馬と斬らゞ。諾と一声る上ホ。拙らゞ。跡と歩て大地ホ踏返時金子伝名糸ハ。隊伍と古花ホ変化ふし。直地ホ隆京ゞ旋ヒ。へ突て投ること爆栗破竹。古方ホ熊谷右衛ホ石谷。一隊両実の名と一途ホ。隆京と殴んと推捕囲む。ホ得隆京八面ホ当。小息時ハ挑戦へども。嘔えゞとやお

ゞーゝん。辛歯ホて逃出ヒ。金子熊谷石谷倚。これ撃梶らんと亂逐まるホゞ。隆京危やと気る程こそあヒ。ホ早川の庵従軍。主君の帝ゞヒハ大持と。取て返ヒ門くホハ。今井田名八。神保利助。馮田勘太郎ホ。梶同太良名清。吶川名助。土肥爰次郎。逆巻庄太郎ホ。拍雪與太ゑんどこれもこれもと隆京を。加護て先と奏ゑさう。隆京逐隆子河と波て。井柿辺まで逐きゝる。佐又吉川元長ハ。桑名ゞ隊伍と形岩ー。吉良ゞ隊伍ホ掛て投。中ホも松原烈戦ーゝれバ。援ゞ寄も遊佰で岩蒐ると大将伝駆。既ホ山田戦撃捉て。一息次んと立ると。ホ。僅吉良勢ゞ隊紀と。逐ホ家て行。吁吶吉良豊と投けよと。山田ゞ梶と赤

具とあし。左方ハ休らふ久武勢と。合セて一途ハ右川ゞ横際より。突蒐り百縦百横子刺ハ別猛威と決めて刺出まバ。右川勢ハおもたゞにも。紛ことして亂起。これハ気を得て右良索名。怒濤の如く溢返せ。その洋洋の活さハ。一騎当千卒並躍ゞ。漫ことして流る河へ子時万倒ハ崖辺自方とて。ハ杖んと。枝原一騎踏止り。逆来敵を遮ゆる而ハ。伝祝際迫く弛進て。騎辺拒と業そんし。肩先をこし破らをるゞ。別気の枝原その侵ハ。河へ乗辺落通さり。然るハ大将元長ハ流の下より。勝川の濁合ハ馬を綺辺ゞる。縦ひて自方の殘兵軍。右往左往ハ逃入しゝ。逆港波ハ推仆され。溺死する軍いく百

人。それゞ中ハも元長へ。潘く水面へ畏怯ちくも。馬と綺投游ゞセゞるゞる日の雨ハ勢激しく。逆ハ馬足を綺濁め。水底へ潜と墮没る。然ども元長流術ハ練達しゝゞれバ。猛盛を被さる家。五十歩だりの水底と。難ちく並涯の岸ハ踏り。一息次で那流を視をバ。自方の兵士影しく。溺つ流つ流沫る。可哀投て得さヤんと。岸辺ハ生さる大竹を。斬てハ流し。伐てハ流し。大音発て。快ゞ竹ハ操兵べし。強き兵ハ本を操り。水をあゝめハ泳をべし。弱きものをバ末ハ延らセ。流ハまうセて游ぐべしと。水流の秘とをしえるハそ。右川勢ハいふもさゝあり。小早川の兵卒まで。彼流竹ハ操接こと

辛き命を助りて。上陸さする軍多うりれば大張大将の部署ぞと。他軍も混紛て。うんぜぬものこそあうりりれ

清正察敵謀計固禁出戰　元長破制

山海經ニ曰へる。蓬林の竹ハ。舟を作るニよしとのべども。其ハ帝德の所感ニして。天より為る物なるニ。その餘德ニも勝るハ。右川元長ガ流竹あんぬ。浩る云双の名將なれども。年少壯ニして勇を好めば。再度敗戰ニ逸ぎれりるも。是亦戰場の平生といふべし。うくて亦小早川隆景ハ。元長ニ先達て河をこうり。右川の勢とも共ニ渉ふる。晡天ニ迎き出刻。漸く井柿まで来りるガ隆景肱と云悟て。呼張うり敵の陣所ハ猿と名とする嶺あるニ。宿陣ガ任まる逆岩ハ井柿といふこそ忘るる亦已猿ゆく柿と喫ふの理あれば。敵ゆく也亦天然ゆ彩偉しき地ニ住らんより。一旦松山ニ退きて。立計所と斎一ニ。軍儀を設て戦ぎんと。逆ニ井柿の岩を退き。松山の協外ニ陣を取り。軍の始終を清正へ。精〻稟さ〻りり。佐又長号系ハ信祝ハ。金子伝兵衛と清侍と佐勢と混め。凱歌唱て陣所ニ退去佐士の戦功を志ぎ〻愛〻。稼び佐將と集会して。来日合戦の保儀ニ逆ぶ。响ニ伝祝発云さ〻く。俺們逆遣の一戦ニ。新だうり徐術と懲云。敵を拗却せしうへ直地ニ松山へ推進て城を一時ニ揉

返〻上方勢を退退らん。這後ハ如何ふとあり〻れバ。
金子駿忠進〻出。今最も理りあれども。茲ふ一箇の憂
あり。其而猶いうんと是を推さふ。昭日陰宗元長倚波
相ふ紋並セ〻戦。清正那陣ふあり。あぐ〻。出戦セざる
事ハ〻〻。所〻〻。主計頭ハ智勇ふ冨て。強ふ畏るべ
き一将ふまし。定て松山の城ふ在て。計策を遣つるもの
ふ〻ん。唯敬公を勾引出して。伐捉らんふハ如べ〻〻ぎ。
君今陣を推出し。器を設て多を待の。謀略を行ん
各〻ふと宗ふそ。伝親をしめ這理をよ〻とし。金
子ぐ軍配ふ陸呪て。勝川と推渉り。井柿嶺と本陣と
て。松山の城より二里を隔て。陣殿〻〻を次第ふ造らセ。

覘谷といふ細流と穿裁らセ。柵鹿角橋を〻〻く繞ら
し。嚴重ふこそ備へられ。佐も右川小早川ハ。同じく城外
ふ陣營を固め。枚原倚の負痍を。大切ふ補治ふさしめ。
去将席を同〻じて軍の評議をふまをところへ。加爰清
正援来りぬ陣代ふあれバ陰宗元長席を譲りて上座
ふ迎え。両将紋軍の罷を解補ふ清正もまた敢れざ
りし。緯を迎ふ述早り。主計頭ていふやう。君遠来
ハ日本ふ。内府を敬とまる談ハ。卵と石とふ比をとも
可ありと懐ふふ齟齬セし。四國の武勇那栄家をもて
屠ともセざるも理君今紋の設〻〻る。陣懇とく至さ
つまるふ。合戦もつとも難〻るべし。唯智と先じて勇と

後ふ一。敵ふ城を奪われざるこそ肝要なれ。然して
官又計策を設け。臨機応変ふ敵を破らん其を今揣
て。戦を先ざるものなくば。くもあるべを含るゞ器ふ羅ら
ん。努く出軍作云用ありと天地を覩徹一言ふ蹙京陷
ど感服ふ一。験ふゞふ至理ふいと清正ゞ得ふ同云
ゞり。結るふ吉川元長ハ。数度の敵軍ふ征を紫り。うつ
ふんの鬱憤るゞ如く。怒て昭人今陽若云人ふ普く陣を
布るる箇條。その時ゞふも突発して。敵を跑散し拒げ
んと。揮れられるをふ早川ゞ。敵の隙列の奇ある戦を
て呂顧止めゝりるゞ。遠次ハ是非戦ちんとんを決し
る布へ清正牧も出馬を制して。戦を好まざりられば。

怒くん心中ふ恨を結び。不快ふあれども陣代の。行を背きゞと
るれば。渋く据して退陣ふ一。秋原弥八郎。有地方辺山
取堅を助侍の強士を集め。怒色を含で稟されるゆう。
今日軍陣後ふ清正ふ出馬を制せ。蹙京もまゝ同
心ゝり。其理ふきふハあゝざとりんども。今合戦浅
延引セバ。敵将まゝ〳〵根を源ふ一。敵りゞきふ至る
べ一。将又是四。時須賀侍ゞ。阿弥陀川を敗るの時。敵うう
崩して。逃る戦誓ん布存ふあゝバ。加爰ふ似合ぬ鄙怯ふ
り。今更渠ゞ行ふ背くハ。不和の原故あるべられば。君ふ
代て勇士輩素知らぬ敵ふて技強ふ一。敵の陣布ふ
火を発て。不意ふ狩誓を做菟べ一。咱赤火の発を嘲号

として。自方を救ふと呼流し。這隙ふ異〳〵る総勢をもて速ふ推進べーと。給よう板原虜起君の御軍虜賢くも宣ふものゝふ。我狀誓〳〵て敵陣と燒時号の火の発を熾まうさん。君さゝゆつふ御出馬あゝバ。伝釈と紐として。全ク久武吉良ゞ首伐。捉ハ今霄のうちふあり。吟発興やと躍蹻と。有地方迫推止め。膝と進めて元長ふ尚ひ。君の御威光父君ふ勝セまふて敵安の合戦ゑ失まふゝあゝざりしーふ。這遺の御賢言ハ。此ニとお遠セる所のい。小臣拙童を遣らもふ。加茂小早川ゞ合戦を制まること。阿喫の軍を試合セゝ后。這方の敵とうち敗る懐達ふいゝゝたゞ。唯得共の二と察極め。勇を後ふ智を先ふ。主客の利絶と料理と考えゝう。今智を試合セまひ。その上ふして有云ふくんバ。御云隨ふ。御出馬あつゝく然るべーと。策立る伐板原うち清。足下の吳兄時ふ応ゼず。唯只君の御計略。利の至極セる所なり。我伝親の首ハ見ずとも。敵兵一弦も戦場ふ足を繋させまをさまゝーと。絶まで結き廣云ふ。元長も又方迫を制し。我言を吟決ーゝう。球を費セことふくを快く准依ゝさまべーと。然燥るふぞ有地方迫。泪伐ふゞして再強ーつまど。強偏容耳バこそ。休ことと伐得ずを御前を退きゞ。陣中ふ辞仮り。三遺強めて容られずバ。身迫くとゝふとゝゝども。いゝでゝ君をまそらるべき。只此上ハ戦場

膊川ホ
竹と砍
流しく吉川
元長自兵
の水ホ溺
ふと助くる

不陪。毆死の外あるべからんと。覺期をふしてぞ出馬せ
まちける。既ふ當夜も全く戌ふ至る比。枚原孫八郎。
准後を調全。拒強の武士三百餘人ふ。枚を含セ鑣を色ふて。
ふく〳〵慳策を持らセつ。潛く地ふ推出セ。これ六月の九
日の夜あをバ。月いまだ東山ふ登らぬ。闇くとして茫
後も矢ぬふ。障りあくして。素名孫次郎ふ。陣ふ迫づ
き。毎手ふ拔セ慳策を。憶の中へ抛込まセ。これ我豆投
ふ乘投く〳〵。柵撃破りて正斜ふ。山田宗六郎一番槍と呼
号。剱禽の如く踊入。これふ絶ひてくられもくと。四角八方
より亂入。拔和ふ火を放。吳口同昔ふ敵を伐る。右川元
長遥ふ來て。ときや火の發ふ燃りるぞ。名軍進めと

指揮まるあどふ。右川勢の一万餘騎。絃勢一渡ふ推發し。
右良奈名ゞ陣中へ。暮然として亂入まる。四國勢ハ頑て
より。朝しる軍ありれば或ハ戮ひ或ハ退き。既ふ拔
曉ふ至る比ハ。陣營二ケ所を奪取られ。慌忙く態をふし。
贊くふあつて敗走セ。右川元長大ふ號き。曦ふ向ふて凱
歌を発。小雲時自名の鋭気を補ひ。疲卒を退け健名成。
交代らセて先ふ進まセ。元長きづゝ正斜ふ躍馬し。遥
図を迎さぞ伝親を移捉。直地ふ土州へ攻投て。内府の御
感ふ與るべしと。藝能登矢の時を得て。逗雲送れまるふ
弁しく。奥斗で接記るふぞ。三の孫ふ構えし久武内蕃
助。一名蕃統の拒抗ともつて。喰止るとゝふとゝへども。右

川ゞ猛威をるゞ乃れば。遂ゝ迫隊も撃破られ。右撲左撲ゝ退て往。時ゝ加藤清正ハ昭秋合戦の発起ゝ戦略より也。細作を純て窺さるゝ。故名若もあく陣を破られ。今朝方まで三陣を奪取猶も進で戦ひゝと。略より清正大ゝ弱き。預て期とハ存ぜしゝど。右川元長張て故の計略ゝ隔ゝり。妄置ぜじと。小早川ゞ陸ゝ純来り。昭秋より右川元長。勇ゝ誇て故陣を云係ゝ破り涼入せること。ゝとく発きるゝ。進で和らるべきゞ。進で撃べき故ゝあらぬ。是刈地器を張て。多と待の策略あり。使者とゝ純セてく制止セざんバ。自方の偉くしを大事あり。とゝふゝ陸宗黄息ゝ。元長原来性偏ゝ也べ。使者を

百遣をとも。勿く諾服まをまゝ。乃士ゝづゝ純向ひ。理解をもつく宥めざんバ。慰ふべくゝと答へるゝ。清正おゝひゝ安悦セゝ也。是下ゝづゝ向ひ。名まゝ何の憂ゝあゝん備不京の変ゝある。後逼をべしと。清正を約し。清正ハ城ゝ辞退る。備ゝ小早川陸宗ハ陣殿の隊伍を厳くセさセ。自拠三ゝ策人を率倶し。右川ゞ跟逐ふて。親ゞ如くゝ純往るゞ。戦場迫くゝ。ゝ名殿の音天地ゝ響き。合戦の最中と見るれば。共ハ一大事ゝ名軍進め。紅よくゝと声を振し。正義ゝ為て純ゝ